印度學佛教學研究第五十四巻第二号　平成十八年三月

親鸞における横超の考察

岡崎秀麿

はじめに

「横超」とは、「他力によって極めて短い時間でさとりを得ること」という意味が第一義として挙げられる。この語は、親鸞が「他力真宗の本意なり」というように、浄土真宗を表す語として使用されている。特によく議論に持ち出されるのは、「往生」と同義的に扱われるもので、それは『愚禿鈔』冒頭二雙四重の教判のその「横超」の下に「選択本願真実報土即得往生也」とあることが理由として挙げられる。

そこで、これら親鸞がどのような部分で「横超」を述べているかを一々考察していくことが必要であるが、この「横超」は『無量寿経』並びに善導教学を背景とする語であることがすでに指摘されているため、ここでは『無量寿経』から考察を出発し、それから親鸞の釈を検討していくという順序で考察を進めていくことにする。

1、「横超」という語について

「横超」の語の背景として善導並びに『無量寿経』を挙げたが、その『無量寿経』には直接「横超」の語はないが、以下の文が「横超」の出拠として認められている。

必ず超絶去して、安養国に往生することを得、横に五悪趣を截ち、悪趣自然に閉ず。道を昇るに窮極なし。往き易くして人無し。その国逆違せず、自然の牽く所なり。

とあるものであり、『無量寿経』の五悪段にある文である。伝統的理解では、この文の「超絶去」の「超」と、「横截五悪趣」の「横」をとって善導が「横超」といったのだと理解する。

そこで、これより『無量寿経』の文について考察していきたいが、まず注目されるのは、この文が「横超」と共に、「自然」、特に「無為・願力・業道自然」の三種の自然の中の「願力自然」を表わす文であると理解されていることである。

i『無量寿経』と「自然」

『無量寿経』が「自然」という語を頻繁に用いていることは周知の事実である。その「自然」とは、「他者によって規定されることなく、それ自身に内在する働きによって、そうなる」という意味だといわれる。『無量寿経』における「自然」の使用法は、以下の二点にまとめられる。

・弥陀浄土の徳相をあらわすもの（無為自然）・・・自動的といった意味で用いられる

・衆生の業の因果をあらわすもの（業道自然）・・・「自然」が「必然」の意味で用いられる

この後者の意味で「自然」が用いられているのは、五悪段だけであることがすでに指摘されている。即ち、五悪段以外での「自然」は、浄土の現出の仕方が、作為なく「おのずから」生起することを示す意味、弥陀浄土の妙用を説くために用いられているのに対して、五悪段では、衆生の因果の必然性を説く業道自然の意味で用いられているのである。

では、何故『無量寿経』において「自然」の語が多く用いられているのかであるが、現在では、老荘思想の全盛時代と、『無量寿経』の翻訳年代が重なっており、その当時の民衆に理解しやすいように「自然」の語を用いたのだとする理解が一般的なものとなっている。しかし、老荘思想でいう「自然」の意味と全く同じではない。

ii『無量寿経』文に対する諸師の理解

さて、この「自然」ということが上記の『無量寿経』の文中には二度使用されており、その意味は「業道自然」を意味するといったが、そのことを諸師の見解を見ることで確認しておきたい。ここでは慧遠を取り上げる。

若得往生弥陀浄土、娑婆五道一時頓捨。故名横截。截五悪趣。截其果也。悪趣自閉。閉其因也。

とあり、浄土において「横截五悪趣」が生じることが明かされ、続いて

初言易往而無人者。正為傷歎。修因即去。名為易往。無人修因。往生者少。故曰無人。其国不逆違。彰前易往。自然所牽。顕前無人。娑婆衆生。文習蓋纏。自然為之牽縛不去。故彼無人

という。「易往而無人」について、衆生が因を修すれば、直ちに往生するから「易往」であるが、その因を修するものが少ないため「無人」であるといい、「易往」は「其国不逆違」に、「無人」は「自然之所牽」に表されているという。そのため、「自然」とは「無人」という状況を生ずるはたらき、即ち業道自然を表すと理解しているのである。

そして、慧遠が「必得超下、重明修益」というように、この文は衆生の修行によって得られる利益を述べるものと理解されるため、ここでの「自然」とは、衆生が修する因によって果が「自然に」得られることを意味すると理解されている。

即ち、衆生の業の因果の必然性を表わすために「自然」が用いられていると考えてよいであろう。

このような慧遠の理解の仕方、『無量寿経』の読み方からすれば、超絶去し、往生を得て、五悪趣をきるということになり、「横截」は往生での出来事となる。

必得超絶、明其所出。往生安養、彰其所至。横截五悪、悪趣自閉、明其所離。

といわれ、「出て」、「至り」、「離れる」として、「自然」は浄土での出来事と理解している。

しかし、伝統的理解では読み方は上記の『無量寿経』の文と同じだが、解釈の仕方が違ってくる。深励は、

横截五悪趣等。これは上に超絶去とあれども、如何にこえることやら知れぬゆえ、その超絶し去ることを下に説き給うなり。

といい、「超絶去往生安養国」、即ち往生することを、「横截五悪趣」が示していると理解している。従って、「超絶去往生安養国」と「横截五悪趣」が同義となるため、「横超」という語も成り立つと理解しているのである。

2、親鸞における『大経』文の理解

この『大経』の文は、『教行信証』の行巻、信巻に引用されているが、ここでは、『尊号真像銘文』における釈を考察することにする。長文であるため、全文は引用することは差し控えることにする。最初の「必得超絶去往生安養国」に対しては、一々の語を釈した後、「娑婆世界をたちすてて、流転生死をこえはなれてゆきさるといふ也」とある。伝統的理解では、これを説明するとされる「横截五悪趣悪趣自然閉」の釈では、

横はよこさまといふ。よこさまといふは如来の願力を信ずるゆへに行者のはからいにあらず、五悪趣を自然にたちすて四生をはなるるを横といふ。他力とまふす也。これを横超といふ也。

といい、「横」＝「横超」＝「他力」とは、行者の「はからい」によるのではなく、「五悪趣を自然に絶ちすて、四生を離れる」意味だという。伝統的理解に沿えば、このことがまた「往生」の意味だということになる。そして、その後の釈では、

悪趣自然閉といふは、願力に帰命すれば、五道生死をとづるゆへに自然閉といふ。閉はとづといふ也。本願の業因にひかれて自然にむまるる也

という。

このように、親鸞は「自然」を慧遠のような業道自然ではなく、信心獲得によって生ずる必然的な働きとして理解している。さらに、その信心獲得をも願力の働き、願力自然によってなされると理解するため、往生浄土に関するすべてが「願力自然」によってなされると理解されているのである。

これらの文に対して、伝統的理解では、「横超」とは往生浄土後の事柄、詳しくいえば、「生死を離れる」という利益が現生に与えられ、それが浄土往生する時（臨終の一念）に現成し、それらが願力自然によってなされるという理解をする。即ち、「願力に帰命すれば、（浄土に自然のはたらきによって往生して、そこで）自然に五悪趣をきる」と理解するのである。そのため、「横超」とは「横截」をその内容として有しており、「横截」するが故に「横超」することができると理解し、それらがすべて「願力自然」によってなされると理解するのである。従って、上記の親鸞の釈を見れば、「横超」とは、「願力を信ずるゆへに」として信において生じる出来事のように思われるが、伝統的理解では、「横超」ということが「悟りを得る」ことと同義であると理解することを基本としているため、「横超」ということそのものは現生においては利益としては語れても、実際に現成することはないと理解するのである。そのように解する根拠は、親鸞が他の部分で、「超はこえてといふなり、これは仏の大願業力のふねに乗じぬれば生死の大海をよこさまにこえて、真実報土のきしにつくなり」などと、「横超」が浄土に生じることと同義として述べているからである。

しかし、「他力」と「横超」が同義として扱われ、また「他力」と「自然」とが「はからいが無い」ことにおいて同義とされることを考えれば、伝統的理解のように「横超」を現生で利益としてだけ語ることは、一面的すぎはしないであろうか。「因」たる信心と、往生浄土という「果」が共に自然の働きによるものであるならば、自然はまた「必然の道」であることを意味しなければならないであろう。「必」とは、「それ以外ではない」ことをいうが、「因果」が共に同一根拠、即ち願力自然に根拠しているが「それ以外にはなりえない」ということが成り立つと言えるからである。そして、信も願力によるもの、浄土も願力によるものとして共に願力所成のものとしてある限り、この因果は同時的であるといわねばならないが、また願力に根拠を有する限り異時的であることを失わないのである。浄土往生することは、信において「必ず至ることができる」という未来なるものとして信にあるといわねばならないのである。即ち、「横超」とは、自力の無において他力の働きが有ること、弥陀の救いの中に摂取されたことが「横超」と言われるのだと理解できるであろう。しかし、では何故救いに摂取されることが「横超」と「超越」の意味を有するのであろうか。今後の課題としていきたい。

〈キーワード〉　横超、『無量寿経』、親鸞

（龍谷大学大学院）

140. Shinran's Idea of "ōchō"

Hidemaro OKAZAKI

This paper considers the term *ōchō* 横超, an important term in Shinran's thought. According to Shinran, "Ōchō is the basic meaning of Jōdo Shinshū." Since the word is drawn from the Larger Pure Land Sūtra and Zendou, this paper examines the case of the former. An additional point is the term *jinen* (自然), which is used differently in the Larger Pure Land Sūtra and by Shinran, a difference which is important for our consideration of the term *ōchō*.

141. The Meaning of "Shōkudoku" in Shinran's Thought

Toyokazu AJIRO

Why did Shinran quote the *Wangsheng lunzhu*'s explanation of "Shōkudoku" in the "True Buddha Land" chapter of the *Kyōgyōshinsho*? I most particularly examine the question of the intent behind the quotation with regard to the "original" meaning of "Shōkudoku". I conclude that the intent of the quotation is to demonstrate the reason why the True Buddha's Recompensed Land is established as fulfillment of the Primal Vow. In other words, the reason clarifies the theory of simultaneous cause and effect according to the "original" meaning.

142. On the Expression "ōjo wo togu" in *Tannishō*

Tetsuryō HARADA

I consider here the significance of the expression "ōjō wo togu" in *Tannishō* Chapter III considering how it differs from the expression "ōjō wo su" in the Daigo *Hōnenshōnin-denki* and the *Kudenshō* of Kakunyo.

A verb "togu" expresses the difficulty of a desire, an intention or an act, of the subject. However, it cannot be said that the distinction in expression of "togu" and "su" in the phrases "ōjō wo togu" and "ōjō wo su" is clear in